

新規語学習場面において情報提供者の 枠発言が及ぼす影響

松 島 暢 志*¹

1. 問題と目的

人間は社会的学習を行う。文化人類学者 Sperber の「表象の疫学 (epidemiology of representation)」によると, ある信念が伝播するためには, 人が実験的に検証できない曖昧な事象に直面した際に参照可能な枠組みとして機能する, 直観的信念 (intuitive belief) と反射的信念 (reflective belief) の2つが必要となる¹⁾。直観的信念とは, 我々が実際にその事象を知覚した結果, もっともらしいと判断した具体性を持つ信念であり, 日常的な環境において信頼できるという特徴を持つ。一方の反射的信念とは, 他者の権威に基づいて形成された信念を指し, 他者からの言説や書物などによって形成され, 埋め込まれた信念である。反射的信念による他者からの情報の取得は, 何から何まで自力で発見する必要がなくなり, そのため他者から聞いたことを信じるのには「実益」がある²⁾。

しかし, 曖昧な状況で他者からの信念を受け入れるのは有益だとは言え, どのような他者でも無差別に信じるのは, 賢い戦略とは言えない。全ての他者が必ずしも有益な正しい情報を提供するとは限らないからだ。受け入れられる情報は取捨選択される。では, 人は何を手がかりとして他者からの情報を取捨選択するのだろうか。

有名なイソップ寓話の「嘘をつく子ども (オオカミ少年)」の話では, 退屈しのぎに「オオカミがきたぞ!」と繰り返し嘘をつき続けた少年は, 本当にオオカミが来た時に警告しても信じてもらうことができなかった。つまり村の大人たちは, それまで少年の情報が嘘だったという履歴を手がかりとして, 少年の発言の真偽を判断したことになる。誤報を繰り返すことで信頼性を失わせる現象を「オオカミ少年効果」と呼び, 例えば災害での避難勧告の正誤と住民の避難行動の関係が議論されている³⁾。

このような, 多くの情報源から信頼できるものを選び取る行動は「選択的信頼 (selective trust)」と呼ばれ, 就学前期の発達心理学の中でも研究がなされてきた⁴⁾。Sabbagh らは, 新奇な対象に新規語がラベル付けされる際に, 断定表現をしたり, 「知っている」と明言する博識な話者と, 「うーん」とうなったり「多分…」という発話をする無知な話者のどちらを4歳児は信用するかを検証した。その結果, 4歳児は無知な話者からのラベルをブロックした^{5) 6)}。つまり, 幼児は言語的な手がかりを明示された場合に他者の知識状態を推測することができ, その他者から与えられた情報の取捨選択ができると言える。

また「オオカミ少年」の寓話同様, 情報提供者のそれまでの履歴情報が, 幼児が他者の言動の信頼性を見積もる際に利用されることを実験的に示した先行研究もある。工具のようなこれまで見たことのない新規物に対して, “feppin” などのような新規ラベルが付与される場面において, 4歳児 (と一部の3歳児) は, 2人の情報提供者のうち, それまで既知物を正しい名前前で呼んでいた他者を, それまで誤っていた他者よりも一貫して信用した^{4) 7) 8)}。これは, それまでの正誤に関する履歴情報が他者の知識に関する参照枠を形成し, 新規語獲得場面における反射的信念の形成に影響したと考えられる。

情報提供者の正誤履歴が無い場合では, 別の手がかりによって信頼は選択される。例えば, 第三者から同意されなかった他者よりも賛同された他者を, 優先して信頼する, といったような「評判」を媒介とした参照枠を作り上げることも幼児期ではできるようだ⁹⁾。

他に考えられる手がかりとしてはメタ・コミュニケーション要素 (発話されたメッセージ内容とは別のコミュニケーション要素) が挙げられる。例えば Kinzler らは, それまでの正誤履歴がない場合, 外国語のアクセントで話す他者よりも母語アクセントで話

*1 幼児教育科

す他者を選択的に信頼することを示した¹⁰⁾。また、表情や発声の仕方などの非言語的手がかりによっても、他者が意図的に冗談として間違えたのか、真に間違えたのかを区別して、行動を調整することが示されている^{11) 12)}。他にも、選択的信頼の文脈ではないが、メタ・コミュニケーション的な音響の手がかりの最高基本周波数、最低基本周波数、基本周波数の変化幅が、小学生や中学生の他者の心的状態の推測に影響を及ぼすとの研究もある¹³⁾。

そこで、本研究では、幼児が他者への信頼を選択する際に、情報提供者の正誤履歴手がかりとメタ・コミュニケーション手がかりが与えられた場合、どのようにそれらの手がかりを利用するのかを、実験的に検討する。選択的信頼に関する先行研究では、複数の手がかりを利用する場合、特にメタ・コミュニケーション手がかりが含まれる場合の検討は十分に行われてきていないという現状がある。本研究ではその中で、「枠発言 (framing statements)」というメタ・コミュニケーション手がかりに注目する。枠発言とは、その発言によって、前後する行為や言動に「枠」をつけ、その意味合いを定義するという機能を持つ言語表現である。幼児期のごっこ遊びにおいて、「あなたがお母さんで、私がおねえちゃんね」というような遊びの中で立場や役割を明確にする枠発言を幼児が巧妙に使い分けられるようになることや¹⁴⁾、母親が子どもに絵本を読み聞かせる場面で、「はじまりはじまりー」や「はい、おしまい」などのように、絵本の内容だということを明示する枠発言をすることが報告されるなど¹⁵⁾、幼児期においても一般的なものである。それまでの言動に枠をつける機能を持つ表現に関して、木村はその著作の中で、1970年代終わりに流行した「なんちゃっておじさん」の都市伝説を紹介している¹⁶⁾。「なんちゃっておじさん」とは、一人のおじさんが、周囲が困惑するような言動をひとしきり見せたのちに、突如として「な～んちゃって！」ということで、「それまでの言動は私の本意ではありません」という意味を明示するものであり、これも枠発言の一つと考えられる。

これらを踏まえて、本研究で取り上げる枠発言として、「嘘だよ」というものを取り上げる。これは「これまで自分の発言は正しくない」という意味を付与するものである。これまでの履歴によって得られた正誤の情報と、枠発言によって得られた正誤の情報を、幼児がどのように統合して判断するのかを、新規語彙獲得場面を設定して、実験によって検証する。同時に、成人にも同様の課題を課し、幼児の結果と比較することで、選択的信頼におけるメタ・コミュニケーション手

がかりの発達の機序を検討することも目的とする。

2. 方法

デザイン

1 要因 2 水準の実験計画法を採用した。なお試行数と手続きの関係で、成人対象の調査の場合は被験者内要因、幼児対象の調査の場合は被験者間要因となった。

条件

統制条件：履歴試行で全問正解したインフォーマントも、履歴試行で全問不正解だったインフォーマントも、どちらもテスト試行で「本当だよ」という枠発言を行う。この条件は、成人も幼児も全員が行う。

100%・嘘 - 0%・嘘条件：履歴試行で全問正解したインフォーマント (100%正答者) も、履歴試行で全問不正解だったインフォーマント (0%正答者) も、テスト試行で「嘘だけどね」という枠発言を行う。

100%・嘘 - 0%・本当条件：履歴試行で全問正解したインフォーマントは、テスト試行で「嘘だけどね」という枠発言を行う。一方で、履歴試行で全問不正解だったインフォーマントは、テスト試行では「本当だよ」という枠発言を行う。

以上 2 つの実験条件に関しては、成人は全員どちらも実施するが、幼児は半数が 100%・嘘 - 0%・嘘条件に、残りの半数が 100%・嘘 - 0%・本当条件に割り当てられた。

協力者

成人調査：専門学校に在学する成人女性 31 名 (平均年齢 20 歳 6 ヶ月 - 19 歳 - 26 歳)。

幼児調査：保育園に通園する幼児 53 名。60 ヶ月を境界に月齢で二分し、3-4 歳児群 27 名 (女児 12 名、男児 15 名 平均月齢 48.4 ヶ月 - 37 ヶ月 - 59 ヶ月) と、5-6 歳児群 26 名 (女児 13 名、男児 13 名 平均月齢 66.4 ヶ月 - 60 ヶ月 - 76 ヶ月) とした。3-4 歳児群のうち、14 名が 100%・嘘 - 0%・嘘条件に割り当てられ、13 名が 100%・嘘 - 0%・本当条件に割り当てられた。同様に 5-6 歳児群は 13 名ずつ、2 つの実験条件に割り当てられた。

刺激

既知物・既知語：日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙¹⁷⁾ や PVT-R 絵画語い発達検査¹⁸⁾ を参考に、3 歳児であっても十分理解可能な単語を抽出し、

その対象のカラーイラスト16点(例:イヌ, クルマ, クレヨン等)を選んだ。最長で4モーラのものまでとした。また, それぞれの音声を, 男性の発話者によって発声されたものを既知語音声刺激とした。

新規物: 外見からはその名前や用途が推定しにくい対象10点(例: 赤いプラスチック製のへら状のもの, オレンジ色のウレタン製のU字型ドアストッパー等)を用意した。

新規語: 新規物に対する名称として, 3モーラの無意味語を用意した。各モーラの母音の重複が起こらないように音声を擬似ランダムに組み合わせ, 「クトマ(kutoma)」「ラキツ(rakitsu)」等, 日本語の語彙に含まれないものを選んだ。各新規語は, 男性の発話者によって発声され, 新規語音声刺激とした。

履歴試行刺激動画(既知物): 履歴試行で用いる既知物に関する刺激動画は以下のような構成であった。まず, 二人の成人女性インフォーマントの目の前に, 二枚の, 既知物が描いてある絵カードが置かれた[例, イヌとハシ(箸)]。成人男性の音声で「[イヌ]はどっち?」という質問がなされ, それを受けて二人のインフォーマントは同時に, それぞれ自身から見て遠くに位置する絵カードを取り上げ, 胸の前に掲げた。その後, それぞれ「こっちだよ」という発言で, 質問への回答を行う。この動画は, 質問部分を, 「[ハシ]はどっち?」という音声と入れ替えることで, [イヌ]の時に不正解だったインフォーマントが, 同じ動き, 同じ発話でも正解になるように操作可能になっている。このように16種類の既知物をペアにし, 8種類の動画を作成し, 4つずつ組み合わせ, 履歴試行の刺激を2パターン作成した。また刺激動画中で, どちらのインフォーマントが先に発言するかは, 左右でカウンターバランスをとった。

テスト試行刺激動画(新規物): テスト試行で用いる新規物に関する刺激動画は以下のような構成であった。既知物動画で登場した成人女性インフォーマントの目の前に, 二つの新規物が置かれた。成人男性音声で「[クトマ]はどっち?」という質問がなされ, それを受けて二人のインフォーマントは同時に, 自身から見て遠くに位置する対象を取り, 自らの前に置いた。その後, それぞれのインフォーマントは目の前の対象を指さしながら, 「こっちだよ」という発言で質問に対する回答を行い, またその後が続いて, 「本当だよ」もしくは「嘘だ

けどね」という枠発言を行った(二人とも「本当だよ」と言うか, 二人とも「嘘だけどね」と言うか, 一人が「本当だよ」, もう一人が「嘘だけどね」と言うかは, 上述の統制条件, 実験条件に応じて異なる。刺激動画作成においては, どちらも本当, どちらも嘘, 一方が本当で一方が嘘(そしてそれを入れ替えたもの)の4パターンを作成した)。このような動画を対象物10個ペアにし, 5種類を作成した。また刺激動画中, どちらのインフォーマントが先に発言するかは, 左右でカウンターバランスをとった。履歴試行動画, テスト試行動画のどちらも, インフォーマントはニュートラルな表情で, マイルドな発声を行うように心がけた。

手続き

成人調査: 半数ずつに分けての集団調査で, 画面の動画を見ながら, 実験者の指示に従って, 質問紙に回答していくという形式で行った。2つの集団において, 刺激の種類や, どちらが履歴試行で正答するか重複しないようにカウンターバランスをとった。

- ①履歴試行: まず「[イヌ]はどっち?」という文字と, [イヌ]と[ハシ]のイラストが提示されたのちに, 当該の刺激動画が提示された。続いて, 「[コップ]はどっち?」という文字と, [コップ]と「トリ」のイラストが提示され, その後刺激動画が提示される, というシークエンスを4試行繰り返した。履歴試行を通じて二人のインフォーマントのうち, 一方は正解し続け【100%正答者】, もう一方は不正解を選び続けた【0%正答者】。
- ②テスト試行: 最初に, 統制条件のテスト試行が行われた。まず, 「[ホクテ]はどっち?」という文字と, 2つの新規物の写真が提示された。その後, 二人のインフォーマントの写真が提示され, 「2人のうち一人だけに聞きたいときどちらの人に聞きたいですか? 当てはまる人物の下の空欄に○をつけてください」という質問に, 協力者は質問紙上のインフォーマントの写真に○をつける形式で回答した【インフォーマント選択質問】。その後, 新規物の刺激動画が提示され, その動画中では100%正答者も, 0%正答者も, 「こっちだよ」の後に「本当だよ」という枠発言を行った。その後, 「[ホクテ]はどっちだと思いますか? 当てはまると思うモノの下の空欄に○をつけてください」という質問に, 協力者は質

問紙上の新規物の写真に○をつける形式で回答した【対象選択質問】。

統制条件を4試行行った後、100%・嘘-0%・嘘条件、100%・嘘-0%・本当条件の順に、同様の手続きでテスト試行を4試行ずつ行い、それぞれ【インフォーマント選択質問】、【対象選択質問】に対する回答を求めた。

幼児調査：保育園内の別室における一対一の個別調査を行った。実験者との十分なラポールを形成した後、協力者はモニターに表示される静止画と動画

を見ながら、実験者の教示に従った。

①履歴試行：既知物である【イヌ】と【ハシ】の静止画が提示され、実験者は「【イヌ】はどっち？」と協力者に尋ねる。協力者が正しく回答したのを確認した後、当該の刺激動画が提示された。続いて、「【コップ】はどっち？」という文字と、「コップ」と【トリ】のイラストが提示され、その後確認質問と刺激動画が提示される、というシーケンスを4試行繰り返した。履歴試行を通じて二人のインフォーマントのうち、一方は正

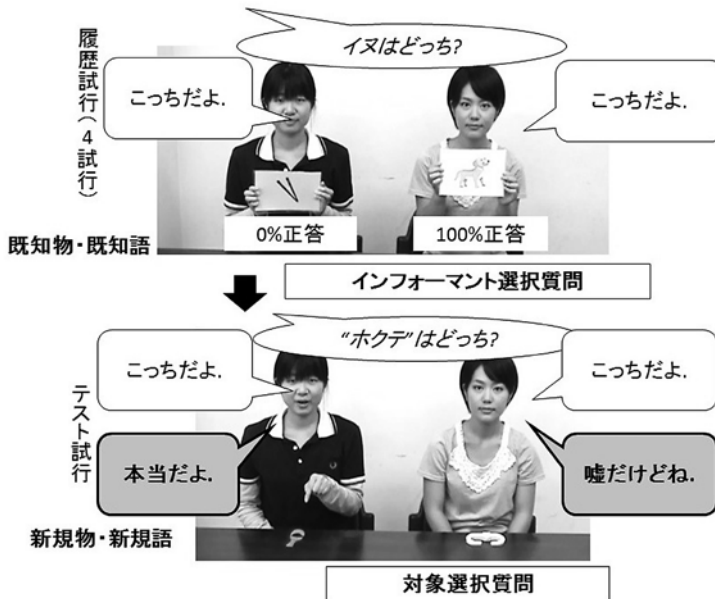


図1. 実験手続きの概要 (100%・嘘-0%・本当条件)

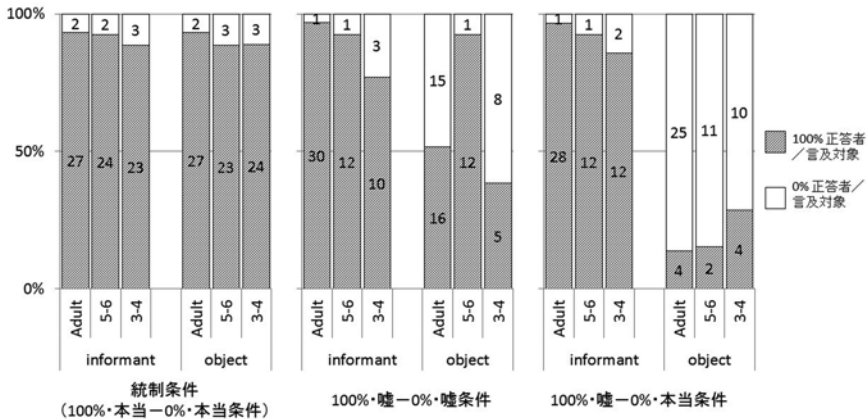


図2. 各条件の選択割合

解し続け【100%正答者】、もう一方は不正解を選び続けた【0%正答者】。協力者が正答履歴を記憶できていない可能性を減じるために、履歴を視覚化し、テーブル上に置いた二人のインフォーマントの写真の上に、正答した側にカラフルな星形ビーズを、「こっちの人が正解したね」という発言とともに、その都度置いていった。この視覚化された履歴は、続くテスト試行中も常に提示されていた。

- ②テスト試行：最初に、統制条件のテスト試行が行われた。まず、「[ホクテ]はどっち?」という文字と、2つの新規物の写真が提示された。その後、モニターに二人のインフォーマントの写真が提示され、「2人のうち一人だけに聞きたいときどちらの人に聞きたい?」と質問し、協力者の回答を求めた【インフォーマント選択質問】。言語での返答、またはモニターへの指さしを、回答の指標とした。その後、新規物の刺激動画が提示され、その動画中では100%正答者も、0%正答者も、「こっちだよ」の後に「本当だよ」という枠発言を行った。その後、「[ホクテ]はどっちだと思う?」という質問をし、協力者に回答を求めた【対象選択質問】。

統制条件を4試行行った後、協力者の半数に100%・嘘-0%・嘘条件、残りの半数に100%・嘘-0%・本当条件を、同様の手続きでテスト試行を4試行ずつ行い、それぞれ【インフォーマント選択質問】、【対象選択質問】に対する回答を求めた。

3. 結果

インフォーマント選択質問で選択されたインフォーマント、オブジェクト選択質問で選択された対象に関して、全て二項検定を行った。

実際の教示と枠発言がなされる前のインフォーマント選択質問に関しては、ほぼ全ての年齢群で有意に100%正答者を選択する傾向が見られた(統制条件:成人27/29人,5-6歳児24/26人,3-4歳児23/26人,100%・嘘-0%・嘘条件:成人30/31人,5-6歳児12/13人,3-4歳児,10/13人,100%・嘘-0%・本当条件:28/29人,5-6歳児12/13人,12/14人;100%・嘘-0%・嘘条件の3-4歳児のみ10%水準で有意傾向。その他は全て両側検定で $p < .05$ を満たす)。このことから本研究での協力者は成人も幼児も、先行研究⁴⁾と同様、それまでの履歴を考慮して、信頼できるインフォーマントを選択していることが明らかになった。

次に、インフォーマントが自身の選択に関しての真偽について言及する枠発言がなされた後のオブジェクト選択質問についても同様の検定を行った。まず統制条件ではすべての年齢群で100%の正答履歴をもつ他者の言及した対象を選択した(100%正答者の言及対象の選択:成人27/29人,5-6歳児23/26人,3-4歳児24/27人 全て両側検定で $p < .05$ を満たす)。つまり、枠発言がどちらも「本当だよ」という場合は、それまでの正答履歴に基づき言及対象を選択すると言える。

続いて行った100%・嘘-0%・嘘条件の分析では、統制条件と異なる傾向が見られた(100%正答者の言及対象の選択:成人16/31人,5-6歳児12/13人,3-4歳児5/13人)。5-6歳児だけが、100%の正答履歴をもつ他者が「嘘だけどね」といって言及した対象を選択したが、成人と3-4歳児はどちらかに偏ることのない選択を示した。さらに100%・嘘-0%・本当条件では統制条件とは逆の結果が見られた(100%正答者の言及対象の選択:成人4/29人,5-6歳児2/13人,3-4歳児4/14人 3-4歳児のみ10%水準の有意傾向で、他2群は両側検定で $p < .05$ を満たす)。5-6歳児と成人は、100%正答者が「嘘だけどね」と言及した場合は、0%正答者の言及対象を選択する傾向がみられた。

4. 考察

本研究は、新規語学習場面において、情報提供者が発したメタ・コミュニケーション的な枠発言が、学習者の選択にどのような影響を及ぼすかを実験的に検討した。結果、幼児期から枠発言の内容と、情報提供者のもつそれまでの正答/誤答の履歴の両者を考慮して、選択する傾向があることが示された。

実際の情報提供と枠発言が行われる前は、3-4歳児から、それまでの正誤履歴を考慮して、情報提供者を選択する傾向が見られ、一貫してそれまで正答の履歴を持つ情報提供者を信頼できる他者として選択する。これは先行研究⁴⁾と一致し、幼児期からの選択的信頼を支持する。

一方、それまで正しい回答をしていた情報提供者が「嘘だけどね」と枠発言をし、それまで誤答だった情報提供者が「本当だよ」と枠発言をした際には、一転してそれまで誤った履歴を持つ他者の言及対象を選択する傾向が幼児期から見られた。これには2つの可能性が考えられる。一つは、「嘘だけどね」という枠発言が強力にそれまでの履歴全体をキャンセルするということである。情報提供者の一方が発した「嘘だけどね」という発言により、それまでの両者の履歴がキャ

ンセルされ、テスト試行が全く新しい学習試行として認識された可能性がある。その場合、結果としてテスト試行で「『本当』を言った」と明示的に表出する情報提供者（たとえそれまでは誤答の履歴を持っていたとしても）の言及対象が選択する。もう一つの可能性は、「嘘」という枠発言自体に、それまでの正しい履歴が適用されるということがある。この場合、「これまで正しい発言をしてきた他者の発する『嘘』ということが正しい」と考えられた結果、その言及対象が避けられた可能性がある。従って、二者択一の排他律によって、残った「嘘」ではない対象、つまり履歴の悪い情報提供者の言及対象が消極的に選択される。

それを検証するために、どちらの情報提供者も「嘘だけどね」という枠発言をした場合を分析した。この場合、成人と3-4歳児はどちらにも偏ることなく、つまりランダムに言及対象を選択した一方で、5-6歳児だけがそれまでの100%正答の情報提供者の言及対象を選択した。3-4歳児と成人の結果は、「嘘」の発言によってそれまでの履歴全体がキャンセルされ、テスト試行ではどちらも「本当」との枠発言をしてないため、ランダムに選択するという一つの可能性を支持するものとも言える。

しかし成人や3-4歳児と異なる、5-6歳児のこの選択傾向はどこから来るものだろうか。二つ目の可能性に基づいた行動をするならば、この場合でも一貫して「『嘘』と発言した、それまで正答し続けていた他者の言及対象」ではない方を選択すると考えられるが、実際にはそうではなかった。これについての可能性の一つは、両者とも「嘘」と発言し、「本当」という明示的な手掛かりとなる発言がなかったため、一度キャンセルされていたそれまでの履歴情報を復活させざるを得なくなり、結果として、それまで正答し続けていた他者の言及を信頼したということが考えられる。この可能性を基に幼児期の一連の発達を仮想すると、3-4歳の頃は、「嘘」という発言自体に過敏に反応してしまう傾向があるが、5-6歳児になるとその過敏さが薄れ、相対的にロジカルな思考ができるようになると考えられる。4歳から5歳にかけて、履歴のような過去に提示された情報だけで判断するのではなく、また枠発言のような「いまここにある」提示された情報だけで判断するのではなく、両者を統合して相対的な判断をする傾向が想定される。このような認知的柔軟性が、4歳頃までは未熟だという証左は、抑制機能に関して研究した先行研究にも多く見られる^{19) 20)}。今後の検討課題として、3-4歳児が本当に「嘘」という他者の発言に過敏で、それによって自らの判断や行動を変え

るまでに至るのかを、実験や観察を通じて明らかにしていきたい。

また、どちらも「嘘」といった場合に、それまでの正答履歴も含めて判断しようとする5-6歳児の選択傾向の要因として、結果的に両情報提供者における「嘘」の意味が、5-6歳児の中で異なっていることも考えられる。つまり、5-6歳児は「嘘」という枠発言に、それまでの履歴情報を加えて、正しいインフォーマントの「嘘」と、間違ったインフォーマントの「嘘」を、別の意味を持つと解釈（例えば、「冗談」としての嘘）したのかもしれない。Leekamの研究では、5歳ごろから、嘘と勘違いと冗談・皮肉を区別しはじめる²¹⁾ ²²⁾。「冗談」は笑っている表情などのメタ・コミュニケーションな手がかりから判断されることが多いが、本研究の5-6歳児はそれまでの正誤履歴の情報から、この場合の「嘘」という発言は「冗談」を含意すると判断したのかもしれない。この可能性はあくまで仮定のものであるが、いずれにしても本研究における5-6歳児が、履歴情報と枠発言情報を統合的に判断する認知的柔軟性を持つということは言えるだろう。

以上のように幼児期からの発達の流れを考えていくと、成人の結果はやや解釈しづらいものになる。5-6歳児よりも認知的柔軟性をもつと考えられる成人が、正誤履歴の異なる情報提供者のどちらもが「嘘だけどね」という枠発言をした場合に、なぜ5-6歳児と同じ選択傾向が見られなかったのか。なぜ「嘘」という発言とそれまでの情報をロジカルな計算をすることで、それまで正しい履歴をもつ情報提供者を選ばなかったのか。本研究のみでこの問いに回答することはできないが、これに対する一つの可能性を考えることはできる。つまり成人は、情報提供者が自分の発言に対して「嘘」という枠組みを与えるのを見た際に、「自己言及のパラドクス」に陥ってしまったのではないか。「嘘をついている人間が自分のことを『嘘つき』だと言及する」という状況では、この命題が真ならば偽になり、偽であるならばその内容により真になるという、無限連鎖に陥ることになる。成人はこのパラドクスに直面したために、過去の情報に遡及して真偽の判断を計算することを止め、ランダムに選択することを選んだとも考えられる。これを検証するためには、本実験の手続きにおいて、枠発言を行うのを情報提供者とは異なる第三者にした、他者言及場面においてさらなる検討をおこなうことが望まれる。

本研究は、認知的柔軟性に関する発達の機序の一つの可能性を導いたと言える。他者を選択的に信頼するための手がかりがいくつか与えられた場合は、3-4歳

ごろはどちらか一方に強く依存する。特に「嘘」という枠発言に対して過敏に反応することで、複数の手がかりを基にした判断ができなくなる。一方で5歳以降は、「嘘」という枠発言が与えられたとしても、手がかりを取捨選択したり、統合的に判断したり、認知的に柔軟性をもつことが示された。このような柔軟性が幼児期以降の、より効率的な社会的学習、文化学習のブートストラップになると考えられる。

5. 引用文献

- 1) Sperber, D. Explaining culture: A naturalistic approach. New York: Cambridge University Press. 1996 年
- 2) Hood, B. M. Supersense: Why we believe in the unbelievable. HarperOne. 2009 年 (フード, B. M. 小松順子訳. スーパーセンス ヒトは生まれつき超科学的な心を持っている. インターシフト, 2011 年)
- 3) 奥村誠. 人々は災害にどう反応するか - オオカミ少年効果と居住場所の選定. 東北大学工学研究科・第5回災害制御研究センター公開講座基調講演録. 2006 年
- 4) Pasquini, E. S., Corriveau, K. H., Koenig, M., & Harris, P. Preschoolers monitor the relative accuracy of informants. *Developmental Psychology*, 43, 1216-1226. 2007 年
- 5) Sabbagh, M. A., & Baldwin, D. A. Learning words from knowledgeable versus ignorant speakers: Links between preschoolers' theory of mind and semantic development. *Child Development*, 72, 1054-1070. 2001 年
- 6) Sabbagh M. A., & Shafman, D. How children block from ignorant speakers. *Cognition*, 112, 415-422. 2009 年
- 7) Birch, S. A.J., Vauthier, S.A., & Bloom, P. Three- and 4-year-olds spontaneously use others' past performance to guide their learning. *Cognition*, 107, 1018-1034. 2008 年
- 8) Corriveau, K., & Harris, P. Choosing your informant: weighing familiarity and recent accuracy. *Developmental Science*, 12, 426-437. 2009 年
- 9) Fusaro, M., & Harris, P.L. Children assess informant reliability using bystanders' non-verbal cues. *Developmental Science*, 11, 771-777. 2008 年
- 10) Kinzler, K. D., Corriveau, K. H., & Harris, P. L. Children's selective trust in native-accented speakers. *Developmental Science*, 14, 106-111. 2011 年
- 11) Rakoczy, M., & Tomasello, M. Two-year-olds grasp the intentional structure of pretense acts. *Developmental Science* 9:6, 557-564. 2006 年
- 12) Hoicka, E. & Gattis, M. Do the wrong thing: How toddlers tell a joke from a mistake. *Cognitive Development*, 23, 180-190. 2008 年
- 13) 野口由貴・小澤由嗣・山崎和子・今泉敏. 音声から話者の心を理解する能力の発達. *音声言語医学*, 46 (1), 71-72. 2004 年
- 14) 加用文男・新名加苗・河田有世・村尾静香・牧ルミ子. ごっこにおける言語行為の発達の分析 - 方言と共通語の使い分けに着眼して -. *心理科学*, 14, 1-19. 1996 年
- 15) 大村彰道・荻野美佐子・遠藤利彦・針生悦子・石川有紀子・白佐いずみ. 絵本読み場面における母子相互作用 (第1報) - 母親の発話カテゴリー -. *安田生命社会事業団研究助成論文集*, 25, 24-33. 1989 年
- 16) 木村大治. 括弧の意味論. NTT 出版. 2011 年
- 17) 京都国際社会福祉センター. 日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙. 2004 年
- 18) 上野一彦・名越斉子・小貫悟. PVT-R 絵画語い発達検査. 2008 年
- 19) Moriguchi, Y., Lee, K., & Itakura, S. Social transmission of disinhibition in young children. *Developmental Science*, 10, 481-491. 2007 年
- 20) Zelazo, P. D., Frye, D., & Rapus, D. An age-related dissociation between knowing rules and using them. *Cognitive Development*, 11, 37-63. 1996 年
- 21) Leekam, S. R. Jokes and lies: Children's understanding of intentional falsehood. Natural theories of mind: Evolution, development and simulation of everyday mindreading. Cambridge, MA, US: Basil Blackwell. 159-174. 1991 年 .
- 22) Leekam, S. R. Believing and deceiving: Steps to becoming a good liar. In S. J. Ceci, M. D. Leichtman, & M. Putnick (Eds.), *Cognitive and social factors in early deception*. Hillsdale, NJ, US: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. 47-62. 1992 年

(受理 平成30年10月31日)

松 島 暢 志

新規語学習場面において情報提供者の 枠発言が及ぼす影響

松 島 暢 志

要 旨

本研究は新規語学習場面において、メタ・コミュニケーション手がかりのひとつである、情報提供者の発する枠発言が信頼性の選択にどのように影響するのかを検証した。27人の3-4歳児、26人の5-6歳児、31人の成人女性が実験に参加した。履歴試行で正解を続けた、もしくは不正解を続けた2人の情報提供者が、新規対象に対して、それぞれ新規語を付与した。その後情報提供者の二人は、枠発言（「本当だよ」「嘘だけどね」）を発した。参加者は、信頼できると考える情報提供者、または新規語を選択した。結果、5-6歳児は履歴の手がかりとメタ・コミュニケーション手がかりを統合して他者の信頼性を見積もるという、認知的柔軟性を示した。

Abstract

Study on the influence of informants' framing statements on novel words learning.

Nobushi MATSUSHIMA

The present study examined how the framing statements, one of meta-communicative cues, uttered by the informants affects learner's selective trust on novel words learning. 27 3-4 year-olds, 26 5-6 year-olds and 31 female adults were participated in the experiment. Two informants, one was accurate and the other was inaccurate in the history trials, labeled different novel words toward the novel objects. Subsequently, they uttered a framing statement ("It's true." or "But, it's a lie"). Participants selected one of the informants and the labels, which they thought to be credible. As results, 5-6 year-olds showed cognitive flexibility; they estimated informant's trust to integrate historical cue and meta-communicative cue.

(Received October 31, 2018)